

# 実践モデルに関するソーシャルワーク演習

松 山 郁 夫

Social Work Exercise about the Practical Model of Social Work

Ikuo MATSUYAMA

佐賀大学文化教育学部研究論文集 第17集 第2号  
JOURNAL OF THE FACULTY OF CULTURE AND EDUCATION  
SAGA UNIVERSITY  
VOLUME 17, NUMBER 2  
January 2013

# 実践モデルに関するソーシャルワーク演習

松 山 郁 夫

## Social Work Exercise about the Practical Model of Social Work

Ikuo MATSUYAMA

### 要 旨

本研究では、グループディスカッション等の参加型の授業において、ソーシャルワークの各実践モデルの特徴を踏まえた上で相談事例を検討することが、ソーシャルワークの思考を身に付けるのに有効かどうかを考察することを目的とした。このため、参加者が行った実践モデルに関するグループディスカッションで検討された内容を考察した。その結果、各実践モデルの特徴を踏まえた上で検討がなされていたため、相談事例を検討する参加型の授業はソーシャルワークの思考を身に付けるように作用していると考えた。

**Key word** : 相談援助演習、実践モデル、事例検討、グループディスカッション 参加型学習

### I. はじめに

#### 1. 社会福祉士養成課程における相談援助演習の意義

「社会福祉士及び介護福祉士国家試験の今後の在り方について～20回の実績を踏まえた検証と新カリキュラムへの対応～」において、「我が国においては高齢化が進展する中、認知症の高齢者や医療ニーズの高い者が増加するなど、国民の福祉・介護ニーズはより多様化・高度化しており、これらのニーズに的確に対応できる質の高い人材を安定的に確保していくことが喫緊の課題」と指摘されている。

社会福祉士養成課程における教育内容の見直しについて、実践力の高い社会福祉士を養成する観点から、実習・演習に関する教育内容についても充実・強化を図ることになった。2008年4月に、厚生労働省社会・援護局から出された「社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」のなかで、「相談援助演習」の目標は、相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し、体系立てていくことができる能力を涵養することとされた。そのために、総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること、及び指導並びに集団指導を通して、ロールプレイング等を活用した具体的な援助場面を想定した

実技指導を中心とする演習形態により行うことが求められるようになった。

これらに対応するため、平成19年「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正とともに、社会福祉士・介護福祉士養成課程における教育カリキュラム等についても教育時間数の充実を図るなどの見直しが行われた。社会福祉士養成に関する旧カリキュラムの科目である社会福祉援助技術演習については、科目名が相談援助演習となり、時間数が120時間から150時間と30時間増加し、演習科目の充実が求められた。

## 2. 社会福祉士新カリキュラムに対応した相談援助演習の内容

社会福祉士養成のための新カリキュラムの相談援助演習の目標に沿って、援助場面を想定した実技指導を中心とする演習が求められた。なお、国が示す教育カリキュラム上はこの法律上の定義との整合性を図るために「相談援助」という言葉が使われている。「相談援助演習」については、実践力の高い社会福祉士を養成するという観点に立って、新たに拡充された教育内容も含め、社会福祉士として必要とされる知識及び技術を統合し、これらを実践的に修得するための科目として位置付け、時間数の充実を図ったとされている。

社会福祉士新カリキュラムに対応した相談援助演習の教員用テキスト（社団法人日本社会福祉士養成校協会編集 2009）では、第1部相談援助の基礎として社会福祉士論、相談援助の基盤と専門職、相談援助の理論と方法、第2部相談援助演習の実践として、相談援助演習概論、相談援助演習教育方法論、グループを活用した演習教育方法、及び事例を活用した効果的な演習教育方法について記載している<sup>1)</sup>

「相談援助演習（社会福祉士シリーズ21）」（福祉臨床シリーズ編集委員会編 2008）では、「相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する」と先述した目標を記載している。このため、総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること、及び個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定したロールプレイ等による実技指導を中心とする演習形態により行うことを重視している。さらに、相談援助演習の意義、相談援助の共通基盤、相談援助の方法、総合的・包括的な相談援助、地域福祉と相談援助、演習・実習体験から学ぶ相談援助、ソーシャルワーク・マインドの実践、及び相談援助演習と体験学習の意味を説明している<sup>2)</sup>。

「社会福祉士相談援助演習」（日本社会福祉士養成校協会監修 中央法規出版 2009）では、「ソーシャルワークの理論、方法、技術、価値体系と実践体系との相互関係を確認し、実践現場での体験に近い演習を行うことで、観察力や理解力、分析、応用、理論化などの能力養成を図る」としている。また、第1部相談援助における基本技術では、人を理解する（「他者理解」と「自己理解」）、相談援助における面接の技術、第2部さまざまな事例を活用した相談援助演習では、地域を基盤とした相談援助演習、実践モデルやアプローチに関する相談援助演習、社会問題を基盤とした相談援助演習、及び対象者別にみた相談援助演習について述べている<sup>3)</sup>。

これらの文献に記述されている要点をまとめると、相談援助演習によって、ソーシャルワークの知識、技術、価値、実践について事例検討を通じた演習形式等により理解を図ること、対人関係能力の向上を図り、面接やグループワークに対応できるようになること、自己理解を深めること、及びソーシャルワークに要する思考ができるようになることを目指す旨、主張されている。また、相談援助演習の方法として、参加型の授業を行うこと、社会福祉の課題を事例検討等により理解を深めること、及びグループディスカッション・ロールプレイ等によってソーシャルワークの思考を深めながら、相談援助の技法や技術を実践的に学習することを求めている。

### 3. 相談援助演習の参加型の授業に関する知見

参加型の授業におけるロールプレイに関して、集団心理療法の1つである心理劇を活用したソーシャルワーク演習については、即興で状況に応じた自発的な適応行為をすると自己覚知に影響を及ぼし、自発的演技を誘発する間接誘導の技法によって、福祉対象者のストレンクス視点を基にしたエンパワメントを強化する。また、福祉専門職者には間接誘導の習得が求められるため、他者理解を深め、ウォーミングアップの段階でイメージアップを図る体験が自発的適応行為と自己覚知に繋がると示唆されている<sup>4)</sup>。

非言語で伝えるには相手に伝えようとする意思、顔の表情の豊かさ、相手との意思の疎通が必要で、非言語による表現をすることによって非言語におけるイメージや心情を伝える性質を認識するように作用し、自己覚知を促すとされている<sup>5)</sup>。さらに、心理劇におけるウォーミングアップを中心とした相談援助をテーマとする演習によって、他者が感じたり考えたりしたことを自己のなかに取り入れると気づきを促し、役割行為がパーソナリティの発展につながることに、及びある役割を演じる体験から生じた感情や考えを述べると自己洞察につながることを考察されている<sup>6)</sup>。

### 4. 本研究の目的

社会福祉士養成のための相談援助演習における参加型学習のうち、ロールプレイとは形態は異なるが、参加者が各種の実践モデルに関する相談事例をグループディスカッションによって学んだことを明らかにする必要もある。さらに、グループディスカッション等の参加型の授業により相談事例を検討することが、ソーシャルワークの思考を身に付けることに有効であったどうかを考察すると、相談援助演習の内容をより深めることができると考えられる。

したがって、本研究の目的は、グループディスカッションによる参加型の授業において、ソーシャルワークの各実践モデルの特徴を踏まえた上で相談事例を検討することが、ソーシャルワークの思考を身に付けることに有効かどうかを考察することとする。

## II 研究方法

2010年度に実施したソーシャルワーク演習で、グループディスカッションに参加し、相談事例を検討することを体験した7名の参加者に、検討する際その要点を継時的にまとめること、及び登場するケースに対する周囲の人の捉え方はどの実践モデルの捉え方に当てはまるのかを確認することを求めた。さらに、このことを踏まえて問題の解決を図るためにはフォーマル・インフォーマルの社会資源の活用も含めて、どのようにしたらよいのかを検討し、検討が終了した直後、事例の要点、検討したことの概要と感想を再現して記述するように指示した。なお、グループディスカッションを1時間程度で実施すること、及びその後の記述は20分程度で行うこととし、説明や指示も含めて1つの相談事例を1コマ(90分)で終えるようにした。グループの学生間の相互作用も重要であるため、これらの演習による学習を進めるために努めて自分の考えを述べたり、相手の考えをよく聞いたりするように教示した。

題材となる相談事例については、「社会福祉士相談援助演習」(日本社会福祉士養成校協会監修 中央法規出版 2009)に記述されている相談事例を使用した。現在、ソーシャルワークに関する様々な実践モデルが開発されているが、今回の研究においてはソーシャルワークでよく使用され、社会福祉を学ぶ学生にとって馴染みのある、治療モデル、環境モデル、生活モデル、ストレンクスモデル、心理社会的アプローチ、機能的アプローチ、及び問題解決アプローチに関する内容を含んだ相談事例を検討した。以下の事例の概要については、5コマ(1コマ90分)のグループディスカッションにおいて参加者が継時的にまとめ

たものである。

倫理的配慮としては、事前に参加者に対して、事前にソーシャルワーク演習後に書いてもらった事例検討の概要や感想を、ソーシャルワーク演習における事例検討の活用の仕方に関する研究に使用すること、その際、個人のプライバシーは保護されること、及びこれらに関することは授業成績への影響は全くないことを説明し、全員から同意を得ている。

### Ⅲ グループディスカッションにおける検討内容

#### 1. 事例①

##### ●事例の概要

Aさん(35歳・独身男性)は、精密機器メーカーで技術者として働いていたが、不況のあおりで5年前に会社が倒産した。その後、派遣社員として転職を繰り返しながら働いた。まじめで几帳面だが人間関係に不器用さがあり、人間関係のトラブルで仕事を失い、不安やストレスを酒で紛らわせていた。仕事を失い、さらには友達も離れてしまった。仕事がないのはAさんにやる気が欠けていて仕事を探す努力が足りないからで、酒がやめられないというのも意志が弱いからだと思つた。このため、母親に送金を頼んだときに「Aさんの努力が足りない」と言われた。

ついに、生活がままならなくなり母に相談する。母はAさんの様子を見てショックを受け、酒を断ち、仕事を探して立ち直るように説いた。NPO法人のBさんは、Aさんが失業したのは社会が不況だったため、貧困をなくすためには社会制度や政策、人々の考えを変えていく必要があると言つた。Aさんは酩酊状態になって転落して入院することとなり、C医師はAさんが働けないのはアルコール依存症のため、アルコール性肝障害になりつつあるため治療すべきと説き、Dソーシャルワーカーを紹介した。DソーシャルワーカーはAさんの望む生活の実現のために自ら課題に取り組み、周りの環境への働きかけも重要と考えた。

##### ●検討したこと

治療モデルの捉え方をしているのは母親とC医師である。その理由について、母親が「仕事がないのはAさんにやる気が欠けていて仕事を探す努力が足りないからで、酒がやめられないというのも意志が弱いからだ」、及びC医師が「Aさんが働けないのはアルコール性肝障害のためなので治療すべき」と言っているため、二人はAさんの環境を見ることはせずにAさん本人の責任と考えていると捉えた。

生活モデルの捉え方をしているのはDワーカーである。その理由について、母親、友人、労働環境、アルコール依存症などAさんが社会的に孤立していることを整理し、Aさんが望む生活を実現するためにAさん自身が課題に取り組むように促すと同時に、Aさんの環境への働きかけも重要だとしたためである。治療モデルは利用者本人の問題に焦点をあてるのに対し、生活モデルは利用者本人だけでなく利用者とその環境の交互作用にも焦点をあてる点に違いがある。

このモデルの事例では、仕事を失ったことでストレスを感じ、アルコール依存症になり生活に困窮しているAさんに対して母親、C医師、Dワーカーがどのような視点で見ているかを検討した。また、参加者には、「Bさんのように環境のみに焦点をあてた環境モデルも存在する」、「1つのモデルからだけで問題解決を図るべきではない」、「問題を把握するためには個人と環境の両方に焦点を当てる必要がある」、及び「治療モデルの考え方はソーシャルワーク的でないという思い込みがあった」との気づきがあった。



## 2. 事例②

### ●事例の概要

E子さん(14歳)は小学校の時のいじめがきっかけで不登校になったが、仲のよい友人に送り迎えをしてもらったり学校では一緒に過ごしてくれたりして支えてくれたため、何とか小学校を卒業した。この経験から受験勉強をして私立の女子中学校に入学し、中学1年生1学期まで楽しく登校した。しかしながら、二つのグループの仲介をしたことがきっかけでいじめが始まり不登校になった。Fソーシャルワーカーに相談することになり、初回面接のときに物怖じせず一人で面接室に入ってきた。Eさんは、学校に行きたいとは思っていると言った。(※—後半略—)

### ●検討したこと

ストレングスモデルでは、援助者にはクライアントの「強さ」や「能力」に焦点をあてていくことが求められる。このモデルの事例では、明らかにストレングスモデルについて記述してあるため、不登校が続いている14歳のEさんのストレングスを見つけることが議題となった。

「いじめられた経験から受験勉強をして私立の女子中学校に入学した」、「初回面接のときに物怖じせず一人で面接室に入ってきた」、及び「Eさんは、学校に行きたいとは思っている」等の記述がEさんのストレングスを表しているように思えた。したがって、クライアントのストレングスについて捉えるためには、現在のストレングスばかりでなく、過去の話の中で出てきたストレングスにも着目し、過去のものとのものを分類することが効果的な支援を考えるために必要だと考えた。また、クライアントのストレングスをできるだけ多く見出すこと、及びそれを基にして支援に必要な社会資源の活用を考えることも不可欠との意見もあった。

## 3. 事例③

### ●事例の概要

G子さん(中1女子)は不登校の状況が2か月続いており、スクールソーシャルワーカーに相談し、学校に行けない理由等を話した。(※—中略—)面接後半には笑顔も見られるようになったため、誰かに話したかったのではないかと思われる。母親がよく「学校に行きなさい」と言って、本人にプレッシャーをかけていることも原因と見られる。なお、父親は単身赴任中である。(※—後半略—)

### ●検討したこと

心理社会的アプローチについては、心理社会的状況下にある人間の行動や発達に着目する。このことを念頭に、不登校が2ヶ月ほど続いているAさん(女子)に対し、心理社会的診断を行うという形で演習を行った。Gさんの状況は、「不登校が2か月続いている」、「スクールソーシャルワーカーに相談した」、「学校に行けない理由等をワーカーに話した」、「面接後半には笑顔も見られ、誰かに話したかったのではないか」、「母親が学校に行くようプレッシャーをかけている」、及び「父親は単身赴任中」等、環境面・心理面の相互作用を認識し、Gさんがニーズを話せるような環境づくりが支援に必要となると検討された。

心理社会的診断の具体的なやり方として、①Gさんの問題が存在する原因、誰が、何が、どこが問題の解決に向けて変化しやすいのかというGさんと状況との関連性、②初期段階からの介入の際の留意点、③Gさんとの今後の面接の展開、④暫定的目標の4つについて検討した。アセスメントが難しかったが、参加者で意見を出し合いながら検討を進めることを通して、心理社会的な考え方を理解していくことができた。このアプローチにおいては、クライアントの行動や発達が示す意味を考え、言語化することが望ましいと考えた。

#### 4. 事例④

##### ●事例の概要

Hさん(26歳・男性)は統合失調症の診断を受け、精神科病院に入院し、9か月が経過した。現在休暇中である。Hさんは大手自動車メーカーの技術部門に採用されたが、突然営業部門へ配置換えとなった。人付き合いが苦手で、慣れない営業職にストレスを感じ、成績も上がらない。上司からの叱責も厳しく、職場でも孤立するようになった。欠勤する日も増え、眠れない・食事が十分に摂れないなどの状況に陥った。仕事でのトラブルで出勤できなくなり、妄想や独笑や生活リズムの乱れなどの状況で、心配した両親が本人を説得し入院となった。現在は、薬物療法により状態は安定しており、退院の話も出ている。Hさんも退院を望んでいるが、その後の展望はもっておらず仕事も「無理だと思う」と話している。ソーシャルワーカーから退院後は精神科デイケア施設を利用するような提案がなされた。(※一後半略)

##### ●検討したこと

精神科病院に入院しているが現在は病状が安定し、早期の退院が計画されているHさん(26歳・男性)の抱えているニーズや問題を読み取り、今後の課題を考えることが議題となった。Hさんのニーズは退院すること、問題は、「人づきあいが苦手で営業職は極度のストレスを生み出す」、「欠勤が増え一日中自室にこもり、夜間は熟睡できない」、及び「仕事がうまくいかないのは上司のせいだなどの妄想がみられる」ということである。したがって、課題は再発を防ぐことで、このためには、生活リズムの確立、精神障害について理解すること、長期入院による体力の衰えを回復させること、コミュニケーションスキルを身につけること、自分に合った仕事を見つけること、自分のやりたいことを見つけること、及び生活障害を改善することが必要と考えた。

これらに基づいて、Hさんが自分の仕事について考えられるように支援していく必要がある。このため、機能主義アプローチによって、クライアント自らの意思による決定を支え、問題やニーズを明確化し、ニーズに適合した利用のため機関の機能を具体化・個別化し提供していく。Hさんの問題に対する課題は、コミュニケーションスキルを身につける、症状を軽減し安心して生活できるようにする(生活障害の改善)、及びやりたいこと(Hさんに合った仕事)を見つける等があげられる。

ここでの機関の機能とは精神科デイケア施設の機能であり、長期入院による体力の衰えを回復、安心して生活できる場(自分の居場所)、生活リズムの確立、精神障害の自己理解、仲間との関係作り(コミュニケーションスキルの向上)などと考えられる。これらに基づいて、Hさんが自分の仕事について考えることができるように支援していく必要がある。

#### 5. 事例⑤

##### ●事例の概要

Iさん(41歳・男性)には妻と子(二人)がいる。Iさんは脳出血の後遺症で左方麻痺があるため、リハビリテーション病院で治療を受けてきた。歩行は何とかできるようになったが、退院後の不安を感じている。退院時期が近づいてきたころ、「自分は治っていない、このまま帰れない」という発言があったり、「上司に復職は無理ではないか」と言われたりしたことで不安感を抱いていた。

リハビリスタッフによるIさんの現在の作業能力・耐久性については、1日1～2時間程度の就業は可能な体力があること、電車ではよろける可能性があるため、今後通勤する練習が必要なこと、及び基本的なデスクワークは可能だが病前のようにできるかは今後、職場での評価と練習が必要なこと等が評価されている。

Iさんは、復職したい気持ちが強く、上司に認めてほしい、及び会社側に受け入れてほしいという気持

ちが強い。なお、ワーカーと一緒にどのように準備していくのかを検討したり、リハビリスタッフと話をしたりする等、復職できる環境がある。

#### ●検討したこと

問題解決アプローチでは、人の生活は問題解決の過程であり、困難は病理ではないという視点に立つ。問題解決の主体は利用者であり、社会的役割葛藤の問題を重視し、ケースワークの構成要素である「4つのP（人、問題、場所、過程）」をまとめ、ケースワークを用いて問題解決に取り組む利用者の力をワーカビリティとした。このモデルでは、人は「復職したいが復職できないのではないか心配なIさん」、問題は「どうすれば会社・上司・同僚に受け入れられて復職ができるのか、もしも復職できなかった場合はどうするのか」、場所は「電車通勤の練習をする電車、デスクワークや他との調整等に関する実施評価を受けたり仕事の練習をしたりする職場」、及び過程は「会社側ときちんとした話し合いの場を持つこと、電車での通勤が可能となるように練習をすること」である。

また、動機づけについては「問題に取り組む意欲：家族のために早く復職したい、仕事ができることを上司に認めて欲しい、会社・同僚・上司に認めて欲しいということ」、能力は「復職に向けての力、問題に取り組む力、会社やワーカー、リハビリスタッフとのやり取りをする力」、機会は、「Aさんに合った復職に向けてのリハビリが提供できる場があること、及びワーカーときちんと計画を立てるなどの機会があること」と捉えた。

## Ⅳ 考 察

事例①では、参加者は各人物の考え方を検討した。その結果、母親は治療モデル、Bさんは環境モデル、C医師は治療モデル、Dワーカーは生活モデルという見方をしていると捉えていた。治療モデルでは問題を抱えている人だけに焦点を当てるのに対して、生活モデルでは人と環境の交互作用に焦点を当てること、1つのモデルからだけで問題解決を図るべきではないとの前提があること、問題を把握するためには個人と環境の両方に焦点を当てる必要があること、及び治療モデルの考え方をソーシャルワーク的でないという思い込みから捉える側面があることが検討された。このため、参加者は実践モデルの考え方を把握しているだけでなく、実践モデルに対する自分なりの見方や価値観があるとの気づきがあり、生活モデルを何らかの問題を抱える個人と環境を一体的なシステムとして捉える見方と認識していることが推察される。

治療モデルの特徴は、利用者の心理的側面、パーソナリティの発達に焦点を当てた生活史の重視、面接による援助関係における援助者の主導性、及び調査から診断、治療に至る過程を重視する。その援助の過程は、援助者が利用者に働きかける過程で、目的は自我の強化とそれによるパーソナリティの社会環境への適応を図ることにある。生活モデルの特徴は、問題を生活空間における不適切な交互作用にあるとし、人と環境の接触面に焦点をあて、人の適応能力と環境の特性を結び合わせることでとされている<sup>7)</sup>。これらのことから、グループディスカッションによって、メンバーは治療モデルと生活モデルの特徴を捉えながら検討していると言えよう。

ストレングスとは、生得的な才能、獲得した能力、スキル等の潜在的な能力のようなもので、ストレングス視点とは、援助者がクライアントの上手さ、豊かさ、資源などのストレングスに焦点を当てることを強調する視点であり、援助観である<sup>8)</sup>。現在から将来に至るまでの強さに着目し、それらを活用して問題を解決していく見方である。事例②において、参加者はE子さんのストレングスを捉える際に、その人の現在だけを見るのではなく過去も合わせて捉えることが必要と議論され、生活歴を捉えることが支援の仕



方を考えるうえで重要と認識していた。また、クライアントのストレングスをできるだけ多く見出し、同時に社会資源の活用を考える重要性も指摘していた。したがって、ストレングスアプローチの実践に則した検討がなされていると考えられる。

事例③の心理社会的アプローチについて、参加者は環境面・心理面の相互作用について認識し、G さんがニーズを話すことができるような環境づくりをすることが必要と考えていた。このことは、「状況のなかの人間」という「人」と「状況」と両者の「相互作用」からなる相互関連性を捉えるという心理社会的アプローチの視点の原則<sup>9)</sup>と、同様の見方がなされていることを表している。

事例④では、精神科病院に入院しているが現在は病状が安定し、早期の退院が計画されている H さんの抱えているニーズや問題を読み取り、今後の課題を考えることが議題となった。この機能的アプローチでは、クライアントの主体性を尊重した援助が重視されるため、H さんの置かれている状況や心情をよく推測・想像し、推測したことを基にそのニーズや問題・今後の課題を考えていく必要があるとの認識に至ったことが窺える。

パールマンは、人が生きることあるいは社会的に機能すること (social functioning) は問題解決のプロセスであると考え、自我機能としての問題解決能力を重視した<sup>10)</sup>。事例⑤では、クライアントのワーカビリティに着目して、退院時期が近づいた頃退院を躊躇う様子を見せた I さんの「動機づけ」、「問題に取り組む能力」、「機会」を捉えていた。さらに、問題解決アプローチに必要な、人・問題・場所・過程の 4 つの P、クライアント主体の援助、動機づけ (意欲)、能力、機会について検討することがなされていた。したがって、パールマンがケースワークの定義のなかで用いた相互に関連する 4 つの基本的構成要素を中心に検討されているといえよう。

以上、治療モデル、環境モデル、生活モデル、ストレングスモデル、心理社会的アプローチ、機能的アプローチ、及び問題解決アプローチに関する相談事例を題材にしたグループディスカッションの意義について検討した。上述した通り、参加者によって各実践モデルの特徴を踏まえた上で検討がなされている。このため、実践モデルに関する相談事例を題材にしたグループディスカッションは、ソーシャルワークの思考を身に付けるように作用すると考えられる。今後、今回検討した実践モデル以外のモデルにおいても同様のことが言えるのかどうかを検討し、効果的な相談援助演習の方法を確立していくことが課題である。

## V 結 論

本研究において、参加者が行った実践モデルに関するグループディスカッションの内容を検討した。その結果、ソーシャルワークの実践モデルに関する相談事例を題材にした参加型の授業であるグループディスカッションでは、各実践モデルの特徴を踏まえた上での検討がなされるため、参加者に対してソーシャルワークの思考を身に付けるように作用すると考察した。

### 引用文献

- 1) 相談援助演習教員テキスト 社団法人日本社会福祉士養成校協会=編集 中央法規出版 2009
- 2) 秋山博介・谷川和昭・柳澤孝主: 責任編集 福祉臨床シリーズ編集委員会編 相談援助演習 (社会福祉士シリーズ21) 2008
- 3) 白澤政和 石川久展 福山和女 日本社会福祉士養成校協会監修 社会福祉士相談援助演習 中央法規出版 2009
- 4) 松山郁夫 「ソーシャルワーク演習において心理劇を活用する意義」 佐賀大学文化教育学部研究論文集 15(2) 249-256 2011

- 5) 松山郁夫 「非言語的コミュニケーションに関するソーシャルワーク演習—心理劇におけるウォーミングアップを通して—」 佐賀大学文化教育学部研究論文集 16(2) 133-142 2012
- 6) 松山郁夫 「心理劇を活用したソーシャルワーク演習の実際」 佐賀大学教育実践研究 28 81-90 2012
- 7) A. Gitterman B. Germain The Life Model of Social Work Practice: Advances in Theory and Practice (3 Edition) Columbia University Press 2008
- 8) Charles A. Rapp 江畑敬介 辻井 和男 平沼 郁江ら訳 精神障害者のためのケースマネジメント 金剛出版 1998
- 9) Florence Hollis Casework: A Psychosocial Therapy (second edition) Random House 1972
- 10) H. H. Perlman 松本武子訳 ソーシャル・ケースワーク—問題解決の過程 全国社会福祉協議会 1966

## 参考文献

- 社会福祉士養成講座編集委員会 新・社会福祉士養成講座 6 相談援助の基盤と専門職 中央法規出版 2009  
社会福祉士養成講座編集委員会 新・社会福祉士養成講座 7 相談援助の理論と方法 1 中央法規出版 2010  
社会福祉士養成講座編集委員会 新・社会福祉士養成講座 8 相談援助の理論と方法 2 中央法規出版 2010

## 謝 辞

本研究に協力していただいた方々に感謝致します。